名古屋学院大学論集　人文・自然科学篇　第61巻　第2号　pp. 1–15

〔論文〕

ヴィクトリア朝のレディとしての自負と葛藤

――イザベラ・バードの社会的，宗教的背景を探る――

西　村　美　保

名古屋学院大学外国語学部

要　　旨

本稿では，1878年に来日して日本の奥地を旅したイザベラ・ルーシー・バード（Isabella Lucy Bird, 1831–1904）に焦点を当て，彼女の伝記や著作物を通し，いかに彼女がヴィクトリア朝のレディの正統と異端の両面を持ち合せ，レディとしての自負と葛藤を抱いていたかを考察する。そのために，まずは同時代の中産階級の女性を取り巻く状況を教育面から浮彫にして，いかに当時のイギリスが知的野心を持った女性たちにとって，生きづらく，葛藤に至らせる多くの要因があったかを吟味する。次に彼女の博愛精神と二面性について，宗教的環境や属した階級の文化に照らして考察する。そして最後に『日本奥地紀行』（*Unbeaten Tracks in Japan*）がいかに彼女の深い洞察力や宗教性について伝えているかを例証したい。

キーワード： ヴィクトリア朝文化，ジェンダー，レディ・トラベラー，教育，宗教

Pride and struggle as a Victorian lady: Exploring Isabella Bird’s social and religious background

Miho NISHIMURA

Faculty of Foreign Languages
Nagoya Gakuin University

*本稿は，2022年度～2023年度名古屋学院大学研究助成―「イギリスの女性宣教師とレディ・トラベラーが見た日本：その視点，功績，母国での生活」―を受けた研究成果の一部である。

発行日　2025年1月31日

1. はじめに

ヴィクトリア時代においては，支配階級のレディの理想像は「家庭の天使」であり，社会との接点は社交と慈善活動くらいであった。そのような時代に外国へ単独で旅をしたレディ，いわゆる「レディ・トラベラー」の存在は，レディの多様性とアイデンティティについて深く考えさせるものだ。本稿では，1878年に来日して日本の奥地を旅したイザベラ・ルーシー・バード（Isabella Lucy Bird, 1831–1904）に焦点を当て，彼女の伝記や著作物を通し，いかに彼女が当時のレディの正統と異端の両面を持ち合せ，レディとしての自負と葛藤を抱いていたかを考察する。そのために，まずは彼女と同時代の中産階級の女性を取り巻く状況を教育面から浮彫にする。次に彼女の博愛精神と二面性について，宗教的環境や属した階級の文化に照らして考察する。そして最後に『日本奥地紀行』（*Unbeaten Tracks in Japan*）に見る彼女の深い洞察力や宗教性について吟味したい。『日本奥地紀行』は様々な観点から興味深い内容であるが，当時の日本の風物や事情の紹介にとどまらず，彼女自身の考え方や深い洞察が窺える点が特徴的で，魅力的な作品となっている。特に無信仰な人々に対する批判や，ミッション・スクールにおける外国式教育に対する懸念は強烈なインパクトを与える箇所であり，これらの二点についても光を当て，考察したい。

2. レディであることの自負と葛藤

2.1. 同時代の中産階級の女性を取り巻く状況―女子教育改革運動とその余波

イザベラ・バードの人生や執筆内容に言及する前に，彼女が生きた19世紀の中産階級の女性を取り巻く状況，特に教育問題とその余波について考察しておきたい。

ジューン・パーヴィス（June Purvis）は，その著書*A History of Women's Education in England*の中で，中産階級の少女たちの家庭教育の目標について次のようにまとめている。「何にもまして，彼女らをあの優雅な存在――すなわち，決して生活のために働いたりすることのない『淑女』，そして将来は『淑女らしき妻や母』となるよう育てあげることが，中産階級の少女たちの家庭教育の目標だった。」（パーヴィス　65）[1)]

中産階級の女子教育は均一なものではなく，家庭により異なっていた。それが誰によって，またどこでなされる教育であれ，その教育形態は，「いずれも水準が低く，しかも基準は一様でなかったことから，中産階級の女子教育の改革を追求した人々が直面した課題は，途方もないものであった。」（パーヴィス　73）イギリスの女子教育改革運動の時期については「1840年代に突如として始まり，1850年代と1860年代に勢力を強めていったようにみうけられる」（パーヴィス73）という見解が示されている。中産階級の女子教育が嘆かわしい状態であったのは明らかであるが，女子教育改革運動の開始の理由については，いくつかの異なる解釈が提起された[2)]。その中の一つはガヴァネスに関係している。「女性の教育改革運動は主に，教育を十分に受けていない中産階級の女性が自活を強いられるという事態が増加したということ…から起こったというものである。」（パーヴィス　75）レディにとって賃金労働がタブーであった時代に，唯一リスペクタブルな仕事として社会的に認められたの

がガヴァネスであった。

女性の高等教育が進み，女子大学が創設されていく背景には，ガヴァネス自体が十分な教育を受けていなかったこと，ガヴァネスの窮状，「余った女」たちの問題などがあり，女性の高等教育の必要性が認識されるようになっていた。しかしながら，教育を受けた女性たちが社会へ戻っても，彼女たちすべてが活躍できる場がまだなかった。多くの女性宣教師の中にはこうした事情が影響した者もいたと言われている。

Japan as Seen by British Women in Christian Mission（vol. 1）の序論において，編者でもあるYoko Namikawaは19世紀後半における女性宣教師の雇用の状況に変化が起きたことを指摘する。主要なイングランドの宣教協会の多くは独身の女性宣教師雇用を嫌がっていたが，19世紀後半になり，事情が変わり，特に1880年代以降独身女性宣教師の雇用が広まったのだ。（Namikawa viii）女性宣教師に求められた資格—「出自の良い淑女」でなければならないということ—は変わらなかったが，より専門的な技術や資格を持つ集団が含まれるようになった。

> The qualification most heavily required by home committees for them did not change much; namely that they had to be‘wellborn-ladies’. However, many candidates who were finally accepted by the societies had more professional training as teachers, doctors and nurses. The female missionaries now contained a group of women with professional skills or licenses such as doctors, nurses and teachers, <u>who emerged out of the social changes that happened in Britain in the last quarter of the nineteenth century. They sought for work outside Britain, in better places for them to be able to use their professional skills. Their best and only choice was to become female missionaries.</u> As a result, many of the first generation of British women with professional training entered the missionary stage, that is, to be female missionaries was the alternative to marriage for them. (Namikawa ix, Emphasis mine)

「19世紀の最後の25年間でイギリスに起こった社会変化」については，パーヴィスも前掲書の第4章“Education and Middle-class girls”で論じている。また，上で言及される独身女性の職業集団が「イギリスの外で，専門的技術を使えるようにより良い場所で働くことを求めた」こと，そして「女性宣教師になることが最良で唯一の選択肢であったこと」は大変興味深い事実である。それは，自国内ではまだ高等教育を受けた彼女たちを歓迎する場所が，つまりは居場所がなかったことさえ示唆しているからだ。Namikawaは，日本の「ミッション・スクールの女子校では，イギリス人の女性宣教師たちがキリスト教社会，文明社会の基本としてイギリスの福音派が重視した『家族』についての独自の概念や考え方を教えていた。…イギリス人宣教師も日本人も『家庭』を女性教育のキーワードとし，ミッションスクールが新興の日本の中産階級に受け入れられたのは，このためであった」[3)]（Namikawa xiii）と論じている。これらのことは女性宣教師にとって，非常に皮肉な現実である。いかなる理由からであれ，「家庭」から出て，野心を持って高等教育を受けたとしても，自分たちが後にしてきた世界が重要視する「家庭の天使」信仰を他国で再び植え付なければならなかったのだから。自分のア

イデンティティをめぐって矛盾を感じ，密かに悩む女性もいたのではないだろうか。

イギリス国内で仕事を得て活躍した女性たちもまた，多くの葛藤を抱えていた。創作の才能に恵まれた女性作家たちも，文壇が男性支配的であることで，偏見を恐れ，ペンネームで作品を発表する作家もいた。また，エレイン・ショウォルター（Elaine Showalter）が『女性たちの文学』（*A Literature of Their Own*, 1977）の中で書いているように，19世紀になると，「女性たちは匿名で出版して職業上の正体をあらわすことを避けた。」（Showalter 17）[12] 匿名で作品を出した女性作家の中には，同性からの批判を恐れて匿名にした者もあった[13]。まだ当時の女性作家は，いわゆる女を縛る言説から完全には自由になれず，レディとして期待されるイメージを崩さないことを意識していた作家も多かった。

2.2. レディ・トラベラーの葛藤

そのような時代にイザベラ・バードは，『日本奥地紀行』（*Unbeaten Tracks in Japan*）よりも前にすでに多くの旅行記を発表して旅行作家となっていた。旅に出たきっかけは，脊椎に問題を抱えていて，病に苦しんでいた彼女に対して，医者が外国へ旅行に行くことを勧めたのである。旅行に出て完全によくなって帰ってくるというわけではないが，おおむね，外国でははつらつとしており，国内にいる時は，身も心も病に臥せっていた。オリーヴ・チェックランド（Olive Checkland）は，『イザベラ・バード　旅の生涯』において，「海外のイザベラと故国のイザベラの，どちらかのみを知る友人たちにとっては，彼女の二面性は信じられないことだった。故国のイザベラを知る人は一様に，彼女は病弱でか弱い女性であると言い，海外のイザベラを知る人は，彼女は実にエネルギッシュでたくましい女性であると言う」（チェックランド255）と述べている。チェックランドは，イザベラが同じ月に同じ場所から親友のブラッキー夫人宛てに書いた手紙と妹宛てに書いた手紙とを比較して，後者がポジティブな内容であるのに対して，いかに前者はネガティブな内容であるかを示している[4]。「海外で満ち足りた生活を送っていたイザベラは，病弱な自分の姿だけを知る故国の友人たちには，なかなか真実を手紙に書けなかった。」（チェックランド　255）「海外での冒険を楽しんでいた彼女は，故国の友人たちに宛てては，健康についても旅そのものについても，いつも悲観的な調子で書いた。それはエディンバラに住む親友ブラッキー夫人に宛てても同じだった。」（チェックランド　256）脊椎に問題を抱えていて，独身で，満足に体を動かして働く仕事もできず，イザベラは大きなフラストレーションとコンプレックスを抱えていたかもしれない。国外に出れば，抑圧から解放されるが，国内の友人のことを考えると，再び抑圧された自分に，当時の淑女のイメージである青白い，か弱い女性に戻ったのかもしれない。チェックランドも以下のように彼女の二面性の要因を当時の中産階級に属する女性を取り巻く状況と結びつけている。

> 彼女の二面性は，英国社会の中産階級に属する女性が，妻や母になる以外には何ら建設的な役割を果たせなかった，当時の時代背景にも起因する。病を手段にして医師から転地療養の命令を引き出したからには，故国では，社会が期待するように行動せざるを得なかったのだ。そのコストは大きかったが，確かにきわめて効果的な方法だった。（チェックランド　256）

ジェイン・ロビンソン（Jane Robinson）は，*Unsuitable for Ladies: An Anthology of Women Travellers* の中で，ヴィクトリア時代には‘You could not be a real lady and a real traveller.’という考え方がなされていたことを紹介している。（xii）レディとして期待されるイメージを崩さないことを意識していた作家も多かったように，レディである以上，国内向けには，期待されるイメージについて，プレッシャーが働いたのかもしれない。また，リラ・マーズ・ハーパー（Lila Marz Harper）は，その著書 *Solitary Travelers: Nineteenth-Century Women's Travel Narratives and the Scientific Vocation* の第4章でバードを扱っているが，自らの体験を読者に語る時にバードが「女らしさの言説という限界を考慮に入れる必要があった」[5]（136）と述べ，それが他の旅行者にも適用される点を指摘している。

> In many ways, these restrictions were similar to the ones Wollstonecraft and Martineau had to circumvent. However, Bird Bishop's accounts also reflect an increasing concern with the justification of her travel, dress, and the maintenance of respectability while traveling alone with groups of men, indicating a more narrowly restrictive code of behavior for women in the latter half of the nineteenth century.
>
> These new areas of concern were shared by many British women travel writers of the 1880s and 1890s, resulting in markedly contradictory modes of narrative presentation as the women attempted to be both adventurous and domestic.（Harper 136, Emphasis mine）

さらには，女性の旅行作家たちが構築する‘narrative identities’のようなものに類似点があることも確認されている。（Frawley, Harper）それは「イングランドから遠く離れていることを強調したり，そのことを利用する」（Harper 136）ことで，「このようにして彼女たちは，自分たちの因習に沿わない行動を正当化すると同時に，旅行という行為を正当化するために因習的なイメージを提示することもできたのである。」（Harper 136）

3. 博愛精神と慈善活動

日本を旅することの目的について，バードは『日本奥地紀行』の中で，それが伝道であるとは書いていない。むしろ，藤原を旅した時に記した以下の文章で明らかなように，今回の旅のルートが誰も旅したことのないものであり，その事実が彼女を惹きつけたのである。

> I saw everything out of doors with Ito, the patient industry, the exquisitely situated village, the evening avocations, the quiet dullness, and then contemplated it all from my balcony and read the sentence (from a paper in the Transactions of the Asiatic Society) which had led me to devise this journey, "There is a most exquisitely picturesque but difficult route up the course of the Kinugawa, which seems almost as unknown to Japanese as to foreigners." (Bird, *Unbeaten Tracks in Japan*, vol. 1, 154. Emphasis mine.)

バードが日本滞在中に訪れた場所は，確かに美しいい場所もあったが，貧しい地域，救済の必要を感じさせる場所も多かった。日光の金谷邸は立派だったが，他にも中・上流階級の家庭をもっと訪れるとか，日本の文芸に触れる場所に行って，日本文化を体験することを中心にすることもできたであろうに，彼女は，あえて洗練とは対極にあるところを訪れているのだ。彼女が訪れた場所や表明した考えを吟味すると，やはり彼女には救済とか，宣教に対する関心が強かったのではないかと思われる。

脊椎に持病のあったバードは18歳で手術を受けたが，あまり芳しくなかったので，スコットランドの高地で転地療養を毎年続けた。しかし普段の生活に戻ると鬱病めいた症状を呈するのを繰り返すので，先にも述べたように医師が長期にわたる船旅を勧めたのであった。パット・バー（Pat Barr）は*A Curious Life for a Lady: The Story of Isabella Bird*の中で，これを「当時の独身で神経過敏なインテリ女性に対する典型的な治療法」（‘classic remedy for single, highly-strung, rather too intelligent young women of the period’）と表現している。（バー　168）[6] この医師の助言を得て，1854年23歳で初めて海外への長旅に発った。父親から100ポンドを与えられ，カナダと北アメリカへ旅立ち，最初の紀行文を書き，1856年に匿名で*An Englishwoman in America*が出版され，かなりの評判を得た。その翌年再び健康を害したので，大西洋の旅に出たが，この記録はほとんど残っていないとのことである。イギリスでは，体調不良の中*Good Words, The Leisure Hour, The Family Treasury*などの信用ある家庭用定期刊行物のために寄稿する生活を送っていた。1861年には，アウター・ヘブリディーズ諸島を旅して，‘Pen and Pencil Sketches’を後に刊行しているが，小作人の悲惨な状況を見て，彼らに肥沃な土地がある北米かカナダへ移住することを勧め，実際船の手配など手助けまでしたようである。イギリスにおいても慈善運動に参加し，エディンバラに多くの友人ができたが，その多くは知的で慈善的なサークルを形成している有名人であった。エディンバラではスラム街を目撃して衝撃を受け，1869年刊行の*Notes on Old Edinburgh*の中で，その惨状と彼女自身が感じた怒りを書いている。この後，彼女の健康はさらに悪化して，背中の痛みや鬱病，不眠症といった症状がひどくなる。「医師の忠告に従ってニューヨークへ出航し，地中海を経由して戻って来たが，心身ともに疲労の極みにあり，船から降りることもできないほどだった。」（バー　180）それでも医師の勧める対策に変わりがなく，1872年の夏には，40歳になっていたが，オーストラリアへ行った。そしてサンドウィッチ諸島（ハワイ諸島）とロッキー山脈の旅にも出るのである。かつて病気だったことが信じられないほどの活躍ぶりを見せていた。そしてとうとう1874年にハワイとアメリカの旅からイギリスに帰り，改めて1878年に日本へ向かったのである。1879年にはマレー半島を旅して，帰国しているが，旅はこれで終わりではない[7]。

当時のレディにとって，慈善活動は唯一社会とつながる手段でもあり，レディとしての正統な道である。牧師の妻であったギャスケル夫人がマンチェスターで慈善活動を行っているように，特に牧師の家族ともなると，かなり踏み込んだ活動をしても不思議ではない。しかしながら，彼女が異端なのは，単独で国外へ出て，それもヨーロッパ人が滅多に訪れない国々を旅したことである。日本では，現地で雇った通訳兼従者を伴いながらではあるが，日本人でさえ，踏み込まないような奥地を旅したのだった。

4, 牧師の娘の運命

ハーパーは「バード・ビショップの因習的なリスペクタビリティについての不安と，いかに旅を通して個人的な独立を得ようとしたかということについて，ある程度その答えが彼女の家庭環境に見つけられる」（Harper 145-146）と論じ，宗教的な家庭環境を吟味することの重要性を示唆している。確かにハーパーの主張も一理あるだろう。ただし，ここではむしろ,『日本奥地紀行』に見られるバードの救済や宣教に対する関心の強さの源泉として，その宗教的背景を吟味したいと思う。

バードは牧師の娘であり，宗教的背景が彼女の思想に影響を与えていると思われる。当時のイギリスの牧師の娘についてMidori Yamaguchi, *Daughters of the Anglican Clergy: Religion, Gender and Identity in Victorian England*（Palgrave Macmillan, 2014）にあたり，多くの具体的情報を得た。牧師の家庭では，兄弟がいれば，重要な投資と考えられ，男子の教育が優先された。（Yamaguchi, 46）そもそも，全寮制学校の設立が牧師の息子を第一のターゲットとされていて，聖職禄が減ってきているにもかかわらず，多くの牧師館で息子を全寮制学校へ送った。ロンドンのある牧師が1851年に二つの目的でSt John's Foundational School for the Sons of Poor Clergyを建てたが，その理由の一つは貧しい牧師の息子のために無料の教育を施すためだった。こうして，社会全体で，ジェンダーによる処遇の差別があったのだが，それは牧師慈善金にも関係していた。

> The overriding need at many vicarages to send their sons to boarding schools, notwithstanding their shrinking benefice income, was reflected in the foundation of schools targeted primarily at the sons of the clergy. ... Further, a clergyman in London set up St John's Foundational School for the Sons of Poor Clergy (later St John's School, Leatherhead) in 1851 with the dual purpose of offering free education for the sons of poor clergy and to provide a choir for his church.（Yamaguchi 46）

「慈善金で支えられている母親がいるかぎり，娘は父親が死んでも特別な勉強のための支給はなかった」[8] という事実から示唆されるのは，牧師の娘の多くは特別な勉学を望んでも叶えられないことが多く，ジェンダーによる処遇の差異の大きさに不満をかかえながらも，そういうものと諦めた生活を送らざるを得なかったことである。

当然のことながら，牧師の娘に対する教育上の期待は息子に対する期待とは異なっていた。その教育は周囲を助ける意識を育み，「自己の意思は厳しく制限された」（Yamaguchi, 46）ものだった。牧師の娘であったアン•ブロンテとシャーロット•ブロンテによるガヴァネス小説は，彼女たちのガヴァネスとしての実体験に基づいているが，特に前者の『アグネス・グレイ』は自伝的要素が多い作品であり，主人公のアグネスは，忍耐強く，非常に抑制のきいた女性として描かれている。また，以下のArchibishop Taitの例は，上の息子を優遇して，娘たちに兄に尽くさせるのを当然と思う牧師もいたことを例証するものである。シャーロット・ブロンテの『ジェイン・エア』に登場するセント・ジョンの妹たちを連想させる。

> The teenage daughters of Archibishop Tait were pressed into the service of their elder brother on his return from Oxford, by reading to him while he was engaged in some pursuit that prevented him from reading himself, such as dressing; as a result, the Archbishop proudly wrote, 'he never wasted any time'.（Yamaguchi 47）

バードには妹はいても，兄弟がいないので，Archibishop Taitの娘たちのような苦労はせずに済んだことだろう。それでも，牧師の娘としての教育は「父親や，家族，教区の人々，将来の夫のために役立つ存在にしようという」（Yamaguchi 46）ものだった可能性が多いにある。ただ，彼女の場合は，自己の強い意志が感じられるけれども。イザベラの父親エドワードはカルカッタで弁護士をしていたのだが，妻子をコレラで失ったのをきっかけにイギリスにもどって牧師になり，牧師の娘ドーラ・ローソンと再婚している。また，親戚にも実践的なキリスト教の慈善活動に情熱を燃やす者が多くいた。インドで宣教師をしていた叔母のメアリ，私費を投じて日曜学校のために一室を借り受けていたメアリの母親，ペルシアで有名な宣教師になった従妹のメアリ，さらには奴隷解放者で人道主義者，敬虔なキリスト教信者だったウィリアム・ウィルバーフォースなどである[9]。

バーによると，（もっとも，バーは初期の伝記作家，アン・ストッダートの文章を引用しつつ説明するのだが）一家は，毎年，タップロー・ホールに住む祖父の家で夏の休暇を過ごし，イザベラたちは，そこで多くのことを学んだ。

> 'The Taplow grandchildren,' says Miss Stoddart, 'breathed an atmosphere of "causes".' Letters from clerical relatives in India, 'framed with decorum for general reading', contained pathetic stories of poverty, moral degradation, spiritual barrenness, and urged the need for greater missionary endeavour; a guest, on leave, say, from some mission hospital in China or West Africa, told his tales of heathen suffering; the short-sighted maiden aunts, whose spectacles 'gave them an expression of sternness quite foreign to their natures', were stern nevertheless about their daily drinking of sugarless tea in the cause of West Indian slavery, long after the slaves had, in fact, been emancipated. The fervour of Protestant guilt ran high: it was early made clear to Isabella how lucky was her lot compared with that of the uneducated grass-hut native, the unwanted baby in the Calcutta streets. The relatively few abandonments to utter joy she ever knew were bound with that guilt, that deep sense of moral obligation towards the less fortunate. (165–166)

このように，バーは，イザベラが親戚から得た情報から現地の大変な状況を想像して，自分は幸運だと思ったであろうと推測する。そして，大変重要な点であるが，彼女が自分の幸福についてあまり表現していない点について，それを宗教上の罪，あるいは幸運に恵まれない人々に対する罪の意識と関係がある可能性を指摘する。宗教的な家庭環境の影響を受け，自分の幸福よりも他人の窮状に意識を向けることを習慣化されていたのではないだろうか。父親エドワードの頑固さによって教区では居心

地の悪い思いをしたかもしれない。祖父が亡くなった年，エドワードは「宗教的な情熱に促されてチェシャーからバーミンガムへ移り住んだ」が，彼は「安息日に仕事をするタッテンホール［という彼らが住んでいた場所］の農民を敵に回していた。」（バー　166–167）その上，バーミンガムへ移っても主義主張を曲げなかったので，事態はさらに悪化し，最後はバーミンガムを去り，ハンティンドンシャーのワイトンという小さな教区を引き受けた。

5.『日本奥地紀行』に見る深い洞察力

5.1. 無信仰と精神の伴わない西洋化に対する批判

こうした信仰熱心な人々の間に育ち，バードは少なからず影響を受けたことだろう。旅の目的が健康を取り戻すことであれ，前人未到の地に分け入ることであれ，信仰心や伝道の精神は常に彼女にあったはずである。その証拠の一つとして，日本について彼女が嘆息することの一つに無信仰があるのだ。久保田で訪れた医学校で，バードは校長と教頭に案内される。そこでは「外国［西洋］の科学や仕組みが浸透している。」[10)]（letter xxvi, 305）バードが宗教は教えているのかと尋ねると，予想通りの答えが返ってきた。「二人の紳士［教頭と校長］はせせら笑い」（letter xxvi, 306），教頭は無宗教であることに誇りを持って言った。まるでそれが知識人の証であるかのように。このエピソードの結びとして以下の陳述があるが，大変な攻撃力を放っている。

> An Imperial throne founded on an exploded religious fiction, a State religion receiving an outward homage from those who ridicule it, scepticism rampant among the educated classes, and an ignorant priesthood lording it over the lower classes; an Empire with a splendid despotism for its apex, and naked coolies for its base, a bald materialism its highest creed and material good its goal, reforming, destroying, constructing, appropriating the fruits of Christian civilisation, but rejecting the tree from which they spring—such are among the contrasts and incongruities everywhere! (Bird, vol. 1., 306)

彼女の批判は政府の姿勢にまで及び，物質的繁栄のために外国人を雇い入れて西洋化を押し進めてはいるが，精神的なものを取り入れて崇高になろうとしない点を苦々しく指摘するのだ。限られた滞在期間にも関わらず，日本社会のこうした矛盾に非常に敏感に反応しているのを見ても，バードの洞察力と知性を痛感させられる。幼いころから「いかにそれが不快なことであっても，［お世辞やおべっかといった儀礼的な］社会的偽善という拘束物から真実を救い出したいという決然とした願望」（バー　165）があったようなので[11)]，母国にいる時から様々なことに義憤を感じ，感受性と表現の両方が，経験によってさらに鋭敏に研ぎ澄まされていったのであろう。精神性，特に倫理性の強化を伴わない表面的な西洋化に対する批判は度々顔を出し，それは彼女にとって日本の将来に対する憂慮の主な原因である。

> Of the shadow which hang upon the horizon of Japan, the darkest, to my thinking, arises from the fact that she is making the attempt, for the first time in history, to secure the fruits of Christianity without transplanting the tree from which they spring. The nation is sunk in immorality, the millstone of Orientalism hangs round her neck in the race on which she has started, and her progress is political and intellectual rather than moral; in other words, as regards the highest destiny of man, individually or collectively, it is at present a failure. (Bird, vol. 2., 347.)

当時の日本の西洋化の現状は，西洋風のマナーや英語，イギリス哲学や新しい科学思想を含む知識，経済的発展に資するような技などを吸収しようとしていたが，キリスト教が重要視するモラルや高潔さ，誠実さといった精神性を取り込もうとせず，彼女にとって嘆かわしい表面的な西洋化に思えたのだろう。しかしそれは，深く日本のことを考えている表れにも思える。

バードが示す日本人の無信仰あるいは無神論に対する反応については，彼女が違和感を示すのは，上記医学校のエピソードのように，知的な人が平然と無神論者であることを堂々と話すことに対してだけではない。一般の人々が無信仰である一方で，様々な迷信を信じていることにも，違和感を示している。それを語る彼女の文章には軽蔑的な調子が含まれている。

> The Japanese are the most irreligious people that I have ever seen—their pilgrimages are picnics, and their religious festivals fairs; but a pious spirit must have existed once at Tôkiyô.... (Bird, vol. 2., 178)

精神性を伴わない西洋化と無信仰は一見全く別の話のように見えて，実は大変密接な関係がある。それは，バードが11月に京都の西本願寺で，僧侶の赤松連城氏にインタビューした時の発言に象徴される。日本人を「非宗教的な人としか見なすことができない」と率直な意見を述べているのだ。もっともこれに対して赤松氏は現状として肯定しつつ，そのようになった歴史的経緯を説明する。この二人のインタビューは非常に興味深い内容だ。というのも，一つには，異なる宗教の信奉者で，指導者である赤松氏に対して，バードは最初から，彼の経歴や業績から敬意を示しているのだが，会見の中で仏教に対する根本的な質問を率直にぶつけているからだ。二つ目として，赤松氏もまた仏教の優位性とキリスト教の欠点について遠慮なく語るからだ。三つ目として，赤松氏が，バードに対して，キリスト教を危機的状況にしている彼女の母国の哲学や科学思想について語ることだ。

> After speaking a great deal of the demerits of Christianity, he said that he considered that a far more powerful influence than it is now working in Japan in “the English philosophy,” as taught by Mill, Herbert Spencer, and others, while the scientific writings of Huxley, and Darwin’s *Origin of Species*, are stimulating inquiries “which Christianity cannot answer.” These books are translated, and the higher education, rapidly extending, is enabling the young men to acquaint

> themselves with a wide range of similar works in English. Besides this, he said, there are English, Scotch, and German teachers who assail Christianity openly in their lectures, and teach an undisguised materialism. (Bird, vol. 2., 245)

イギリス哲学がイギリスにおいてキリスト教信仰を脅かすだけでなく，仏教とキリスト教の両方を日本において脅かしている現状を赤松氏は伝えた。それによって，宣教師などが抗わなければならないのは，イギリス哲学であって，神道や仏教ではないことを訴える。それでも赤松氏は仏教が復活しうることや，その道徳の教えの高度さを断言し，キリストの道徳的教えの効力を問う。しかし彼と別れてからバードは彼程の教養人が本当に自らの原理体型を信じているということがありうるのだろうかと疑念を示し，どちらの教えが日本の宗教の行く末に強く影響を与えるのかと考える。非常に深遠な内容を含む示唆に富むエピソードであり，バードの宗教そのものに対する関心の強さを伝えている。また，異なる宗教であっても，強い信仰心を持ち，その宗教と国の行く末を真剣に考える人に対しては，深い敬意の念を持って接する姿が印象的である。

5.2. 外国式教育の悪影響への懸念

バードが宣教師による女子教育について，その内容が日本において重視されてきた教育内容とあまりにもかけ離れている点を指摘し，女生徒たちの将来を憂慮するのを見ても，彼女が深く物事を考える思いやりある人であることが再認識できる。

> In Japanese training great stress is laid upon the housewifely education, and to be accomplished in all housewifely arts is a just object of desire with every right-minded Japanese girl. <u>This very essential part of education is almost of necessity crowded out in the foreign schools, and I have not hesitated to express my opinion to my missionary friends as to the injurious consequences.</u> (Bird, vol. 2., p. 219. Emphasis, mine.)

「これだけの「西洋式テーブルマナーで西洋風の食事をするという」贅沢を妻にさせられる日本人はほんのわずかしかいない」現状があり，もちろん外国人にとって，こうした教育を受け，「西洋の習慣に慣れていて少々英語の話せる少女は，多くの場合，日本語と日本の習慣しか知らない日本人よりも魅力的」（Bird, vol. 2., p. 220）であるけれども，この国で生きて行く以上，二つの文化に引き裂かれるようにして生きることの難しさがバードには容易に想像できたのだ。

> To foreigners, a girl in some degree accustomed to our usages, and speaking a little English, is, in many cases, more attractive than one solely Japanese in her language and habits, and with misguided female ambition on the one side, and the habits which prevail in the East on the other, there is much reason to fear that results may occur which would be to none so painful as to the missionaries themselves. (Bird, vol. 2., 220)

また，宣教師による外国式教育の影響で，バードが懸念するもう一つのことは礼儀作法の問題である。彼女の通訳である伊藤のマナーが悪いことを指摘した時，「宣教師のマナーだ」と言われ，戸惑いを隠せなかった。（Bird, vol. 2., letter 51, 220）「日本人の丁寧さの奥にままある不誠実さや偽善を嫌っている宣教師たちが，そんな丁重な行為は時間の無駄だからとやめさせることが確かにある」こと，そして「しばらくでも宣教師から教えを受けたことのある若者が，その礼儀作法や態度がぞんざいで無頓着なために他の人［日本人］をぎょっとさせがちなのも事実である」ことが指摘される。（letter 51, 220）しかし，バードがそのことよりも問題視するのが，「外国人の女性たちが日本の女性の数限りなくある作法についてあまりにも知らなさすぎる」（letter 51, 220）ことだった。「外国人女性に教育を受けた女の子」の礼儀作法や帯の結び方について文句を言うのを耳にしたことがあり，こういう人ほど「キリスト教徒で，外国式学校の成功を切に望んでいる人なのだ」と痛烈な皮肉を持って述べる。（letter 51, 220）そして，以下のように明確に日本的な礼儀作法が汚されることが，いかに不本意であるかを述べるとともに，キリスト教が日本の習慣を根本から変えようとしているわけではないことを強調して，キリスト教に関する誤解を撤廃しようと説明するのである。

> Still it is very distatesteful to me to see a low and graceful bow acknowledged by a hasty “bob,” and all the graceful national courtesies ignored, nor does this “laying the axe to the root of the tree” if hoary national custom commend Christianity. I abhor the denationalization of nations, and should like to see Japanese courtesies studied and met at least half-way, and the etiquette of Japanese politeness informed and infused throughout by the truth and sincerity of the religion of Jesus Christ, which enjoins courtesy and “honour” to “all men,” as it enjoins truth and charity. (Bird, vol. 2., 220–221.)

まさに日本人の礼儀正しさこそ，日本の自然や建築物の美しさと並んで，バードが賛美したものであった。彼女はこの国らしい品位のある礼儀作法がすべて無視されているのを見ることに対する不快感を露にし，「国民から国民性を奪う行為」に対する嫌悪感を示している。キリスト教が誤解されていると感じ，いかにそれが「すべての人」に「礼儀正しさ」と「名誉」を課しているのかを強調することで，誤解を正そうとしている。キリスト教的教育によっても，日本人の美徳が保たれ，その上で，よりよい人格教育がなされるのを望んだのだろう。

6. 終わりに

時折，もしもヴィクトリア朝の人々が現代の日本やイギリスを見たら，どのように思うのだろうかと想像することがある。快適さと物質的豊かさに感嘆する一方で，失われたもの，過去の不便な生活の中にあった慣習や精神性を懐かしむのではないかと思う。品位や敬虔さといった精神性よりもプラクティカルな技術や物質的豊かさの追求に余念のない現状を見て，より一層の怒りと失意を表すかもしれない。バードが『日本奥地紀行』で表した日本に対する批判や懸念は一種の警告のようにも聞こ

える。

本稿を執筆するにあたっては，中心部にいる者と「周縁者」の両方を意識した。通常「周縁者」と言うと，労働者階級の貧困層や犯罪者，零落した女性，いわゆる「堕ちた女」と呼ばれた者たちを連想するが，ヴィクトリア時代に国内で十分に地位があって豊かな生活を享受していた人々にとっては，「周縁者」のイメージの中には，より多様なカテゴリーの人々がイメージされたかもしれないと思うようになった。「家庭の天使」という理想像を体現しているレディにとって，「家庭」から出た女性たちは，異端者と映ったであろうし，国外へ出ていく者はなおさらそうだっただろう。本研究を通して，レディが働くことがタブー視されていた時代には，リスペクタブルな職業であれ，職業婦人として生きること自体，いかに困難であったかを見て取ることができた。活躍の場が国内であれ国外であれ，彼女たち時と場合に応じてレディにまつわる保守的イメージに自分を合せ，妥協せざるを得なかった。自分の中の二面性を感じながら，多くの葛藤を抱え，生きたのではないかと思われる。

注

1） 本稿におけるジューン•パーヴィスの引用は全て，June Purvis, *A History of Women's Education in England*（Open University Press, 1991）からのものであり，和訳は香川せつ子訳『ヴィクトリア時代の女性と教育』（ミネルヴァ書房1999）を参照した。

2） パーヴィスは以下の4つの解釈を示しており，本稿では特に第3の解釈を取り上げている。「まず第一に，何人かの歴史家は，より高度な教育機会を求める女性たちの要求は，民主的権利と個人の自由をよりいっそう拡張しようとする要求の一環であることを強調する。」（パーヴィス　74）また，「第二の解釈は産業化によって，女性に対する職業的機会の拡大がもたらされたことで，より多くの教育を求める要求が発生したというものである。」（パーヴィス　74）第三の解釈は，「女性の教育改革運動は主に，教育を十分に受けていない中産階級の女性が自活を強いられるという事態が増加したということ…から起こったというものである。」（パーヴィス　75）さらに「第四の解釈では，女性の教育改革運動の勃発は，より革新的に女性運動という広範囲な領域と関連付けて捉えられる。」（パーヴィス　75）

3） 本稿における Yoko Namikawa, *Japan as Seen by British Women in Christian Mission* からの引用の和訳は本稿執筆者によるものである

4） オリーヴ・チェックランド，『イザベラ・バード　旅の生涯』川勝貴美訳，255.

5） 本稿における *Solitary Travelers* からの引用は全て Lila Marz Harper, *Solitary Travelers: Nineteenth-Century Women's Travel Narratives and the Scientific Vocation*（London: Fairleigh Dickinson University Press, 2001）からのものであり，和訳は全て本稿執筆者によるものである。

6） 本稿におけるパット・バーからの引用は全て Pat Barr, *A Curious Life for a Lady: The Story of Isabella Bird*（London: Secker & Warburg, 1970）からのものであり，和訳は小野崎晶祐訳『イザベラ・バード：旅に生きた英国夫人』を参照した。

7） バードの自伝的情報や旅に関することは Pat Barr による前掲書の第5章を参照した。

8） 本稿における Midori Yamaguchi, *Daughters of the Anglican Clergy: Religion, Gender and Identity in Victorian England* からの引用の和訳は全て本稿執筆者によるものである。

9） バー，163–164を参照した。

10）本稿における『日本奥地紀行』からの引用は全て，Isabella Lucy Bird, *Unbeaten Tracks in Japan*, vol. 1 &

vol. 2（Cambridge University Press, 2010）からのものであり，和訳は金坂清則訳注『完訳日本奥地紀行』を参照し，文脈に応じ修正を施した。

11）6歳の時，自宅を訪問したある紳士が—彼は自分の選挙のためにそのあたりを遊説していたのだが—イザベラの妹ヘンリエッタを「あまりにもあからさまに褒めるのをとがめて，辛辣な調子で」尋ねたと言う。つまり，妹を褒めるのは自分に投票してもらいたいからなのかと。（バー　164–165）

12）本稿におけるエレイン・ショウォルターからの引用は全て，Elaine Showalter, *A Literature of Their Own: British Women Novelists from Bront ë to Lessing*（Princeton University Press, 1977）からのものであり，和訳はE. ショウォルター著，川本静子，岡村直美，鷲見八重子，窪田憲子共訳 『女性たちの文学』（みすず書房，1993）を参照した。

13）ショウォルターは1810年に友人に宛てたメアリ・ブランタン（Mary Brunton）の手紙を引用している。手紙には，匿名を望む理由が書かれているのだが，それは，たとえ，作家として名声を得ても，批判されたり，同性たちから避けられたりすることが容易に想像できるので，それよりは匿名を望むというものだった。（Showalter 17）

参考文献

Barr, Pat. *A Curious Life for a Lady: The Story of Isabella Bird.* London: Secker & Warburg, 1970.

Bird. Isabella L. *Unbeaten Tracks in Japan: An Account of Travels in the Interior, Including Visits to the Aborigines of Yezo and the Shvine of Nikkô and Isé.* 2 vols. Cambridge: Cambridge UP, 2010.

Dawson, Bee. *Lady Travellers: The Tourists of Early New Zealand.* London: Penguin Books, 2001.

Harper, Lila M. *Solitary Travelers: Nineteenth-Century Women's Travel Narratives and the Scientific Vocation.* London: Associated UP, 2001.

Hill-Murphy, Jacki. *The Life and Travels of Isabella Bird: the Fearless Victorian Adventurer.* Barnsley: Pen and Sword History, 2021.

Namikawa, Yoko., ed. *Japan as Seen by British Women in Christian Mission*. Vol. 1. Tokyo: Edition Synapse, 2009.

Purvis, June. *A History of Women's Education in England*. Milton Keynes: Open UP, 1991.

Robinson, Jane. *Unsuitable for Ladies: An Anthology of Women Travellers.* Oxford: Oxford UP, 2001.

Showalter, Elaine. *A Literature of Their Own: British Women Novelists from Bront ë to Lessing.* Princeton: Princeton University Press, 1977.

Yamaguchi, Midori. *Daughters of the Anglican Clergy: Religion, Gender and Identity in Victorian England.* Palgrave Macmillan, 2014.

ショウォルター，エレイン『女性たちの文学』川本静子・岡村直美・鷲見八重子・窪田憲子共訳　みすず書房，1993.

チェックランド，オリーヴ『イザベラ・バード　旅の生涯』川勝貴美訳，日本経済評論社，1995.

パーヴィス，ジューン『ヴィクトリア時代の女性と教育』香川せつ子訳，ミネルヴァ書房，1999.

バー，パット『イザベラ・バード：旅に生きた英国夫人』小野崎晶裕訳，講談社学術文庫，2021.

バード，イザベラ 『完訳　日本奥地紀行1横浜—日光—会津—越後』金坂清則訳注，平凡社，2021.

バード，イザベラ 『完訳　日本奥地紀行2新潟—山形—秋田—青森』金坂清則訳注，平凡社，2019.

バード，イザベラ 『完訳　日本奥地紀行3北海道・アイヌの世界』金坂清則訳注，平凡社，2022.

バード，イザベラ 『完訳　日本奥地紀行4 東京―関西―伊勢　日本の国政』金坂清則訳注，平凡社，2018.
ロバーツ，エリザベス 『女は「何処で」働いてきたか―イギリス女性労働史入門―』大森真紀，奥田伸子訳，法律文化社，1990.